

銭形平次捕物控

くるい咲き

野村胡堂

青空文庫

相変わらず捕物の名人の銭形平次が、大縮尻おおしくじりをやつて笹野新三郎に褒められた話。

その発端はつたんは世にも恐ろしい「豊屋殺し」でした。

「た、大変ッ」

麴町こうじまち 四丁目、豊屋弥助のところにいる職人の勝蔵が、裏口から調子つぱずれな声を
出します。

「何だ、また調練場から小蛇でも這はい出して来たのかい」

と、その頃は贅ぜいの一つにされた、「猿屋」の房楊枝ふさようじを横ぐわえにして、弥助の息子の
駒次郎が、縁側へ顔を出しました。

「それどころじゃねえ」

「町内中の騒ぎになるから、少し静かにしてくれ。麴町へ巨蟒うわばみなんか出っこはねえ」

「今度のは巨蟒じゃねえ、丈吉じょうきちの野郎が井戸で死んでるんだ」

「なんだと」

駒次郎は、はたし跣足で飛降りました。そこから木戸を押すとすぐ釣瓶井戸で、その二間ばかり向うは、隣の屋敷と隔てた長い黒板塀になっております。

丈吉の死体は、井戸端にくみ上げた釣瓶に手を掛けて、そのまま崩折れたなりに冷たくなっていたのでした。

抱き起してみると、右の眼へ深々と突き立ったのは、商売物の磨き抜いた畳針。

「あッ」

駒次郎も驚いて手を離しました。

「ね、あにき兄哥、丈吉の野郎が、何だつて畳針を眼に突っ立てたんでしよう」

「そんな事は解るものか。親父へそう言つてくれ」

「親方はまだ寝ていますぜ」

「そんな事に遠慮をする奴があるものか」

勝蔵が主人の弥助を起して来ると、井戸端の騒ぎは際限もなく大きくなって行きます。

変死の届出があると、町役人が立会の上、よつや四谷の御用聞でしゅぶさ朱房の源吉という顔の良い

のが、一応見に来ましたが、裏木戸やお勝手口の締りは嚴重な上、塀の上を越した跡もないので、外からくせもの曲者が入った様子は絶対にならないという見込みでした。

それに、丈吉はなかなかの道楽者で諸方に不義理の借金もあり、年中馬鹿馬鹿しい女出入りで悩まされていたので、十人が十人、自害を疑う者はありません。

「持ち合せた畳針で眼を突いて、井戸へ飛込むつもりだったんだね。ところがここまで来ると力が脱けて井戸へ飛込む勢いもなくなった——」

朱房の源吉は独り言を言いながら、もつともらしくその辺を見廻したりしました。

「親分の前^{めえ}だが、こいつは自害じゃありませんぜ」

不意に横合から、変な口を利く奴があります。

「なんだと?」

振り返るとそこに立っているのは、銭形の平次の子分で、お馴染^{なじみ}のガラツ八、長い顔を一倍長くして、源吉の後ろから、肩へ首を載つけるように覗いているのでした。

「ね、朱房の親分、井戸へ飛込んで死ぬ気なら、何も痛い思いをして、眼なんか突かなくたっていいでしょう」

「何?」

「それに、商売柄、縄にも庖^{ほうちよう}丁にも不自由があるわけはねえ」

八五郎は少し調子に乗りました。さすがに死体には手は着けません、遠方から唇^{くち}を尖^{とが}

らせ、平次仕込みの頭の良いところをチョツピリ聴かせます。

「手前はてめえ何だ」

「へエ——」

「どこから潜もぐつて来やがった」

源吉の調子は圧倒的でした。

「神田の平次親分のところに居る八五郎で、へエ——」

「ガラツ八は名乗らなくなつて解あじっているよ、その長い顎あごが物を言わア、看板いっわに偽りのねえ面つらだ」

「へエ——」

「俺が訊くのは、どこから何の用事で来たか——てんだよ。ここへそんな顎あごを突つ込むのは縄張ちげ違ちがえだろう」

「朱房の親分、決してそんな訳じやありません。平川天神様へ朝詣りをして、三丁目へ通りかかると町内中の噂うわさだ。知らん振りもなるまいと思うから、ちよいと顔を出したまでで」

「面だけで沢山だ。口なんか出して貰もらいたくねえ」

「相済みませんが、親分、どう見たつてこれは自害じやありません。自分の手で、眼玉へ

「畳針を三寸も打ち込めるもんじゃありませんぜ」

「ガラツ八も容易に引下がりません。」

「目玉へ畳針を当てて、井戸端へ頭を叩きつけたらどうだ」

「それなら井戸端へ血がつくはずじゃありませんか」

「血なんか幾らも出ちやいないよ」

「もう一度調べ直して下さい。外から曲者が入ったんでなきやア、家の中の者でしょう。」

その男は金廻りも悪いが、女おんなくせ癖せが悪かつたつて言いますから」

「さア、もう帰つて貰おうか、ガラツ八親分なんぞ、物を言うだけ恥を掻かくぜ、——昨夜

はあの良い月だ。井戸端で立ち廻りをやるのを、家の者が知らずにいるはずもなし、第一、

人間の眼は八五郎あにい兄哥あにいの前だが、どこかの岡つ引よりは、よつほど敏捷すばしこいぜ。畳針を突

つ立てられるまで、開けつ放しになつちやいねえ、瞬またたきをするとか、顔を反そむけるとか、何

とかするよ」

「……………」

「畳針は真つ直ぐに突つ立っているし、頬まぶたにも瞼まぶたにも傷はねえ」

源吉はしたり顔でした。死体になつた丈吉は、衣紋えもんの崩れもなく、瞳ひとみへ真つ直ぐに立つ

た畳針を見ると、争いがあつたとは思ひも寄らなかつたのです。

「……………」

ガラツ八はごくりと固唾かたずを呑みました。丈吉が気でも違っていない限り、丈夫な縄も、鋭利な庖丁も捨てて、一番無気味な、一番不確実な、畳針で死ぬ気になつた心持が呑込めなかつたのです。

「神田の八五郎兄哥は、この家の中に下手人がいる見込みだとよ、皆んな顔を並べて、人相でも見せてやんな、——自棄やけに良い男が揃っているじゃないか。女出入りなら駒次郎兄哥などが早速やられる口だぜ。金が欲しきやア、弥助親方だ、——何だつてまた選りよに選つて、醜男ぶおとこで空からつ尻けつで、取柄とりえも意気地もねえ丈吉などの眼玉を狙つたんだ」

朱房の源吉は、井戸端に集まつた多勢の顔を見渡しながら、いい心持そうにこんな事を言いました。

主人の弥助は五十を越した年配、その倅せがれ、駒次郎は取つて二十三、これは山の手の娘に大騒ぎされている男前、職人の勝蔵も、二十五六の苦み走つた男、源吉が言うのは、まんざら出鱈目でたらめではなかつたのです。

「やい、八兄哥、帰つたら平次へそう言いな、近頃少し評判がいいようだが、あんまり出

しや張るとろくな事はあるめえ——とな」

シヨンボリ帰つて行くガラツ八の後ろ姿へ、源吉は思う存分の悪罵あくばを浴びせました。平次にはよつほど怨みうらみがある様子です。

二

「親分、こういうわけだ、あつしは何と言われたつて構わねえが、親分の事まであんなに言われちや我慢がならねえ。お願いだから四丁目まで行つてやっておくんない。源吉の鼻をあかさなきやア、この稼業かぎようは今日限り止よしだ。足を洗つて紙屑かみくず拾いでも何でもやりますよ」

ガラツ八の折入つた様子は、世にも不思議な痛々しさでした。浴衣ゆかたの尻はしよを端折つて、朝顔の鉢の世話を焼いていた平次も、思わず真剣な顔を挙げます。

「たいそう腹を立てたんだな八、手前にも似合わない」

「腹も立てますよ、親分」

「まあいい、俺にまで喰つてかかれちや叶かなわない、ちよつと行つてみるだけでも、見て

やろうか」

と平次。

「親分、本当に行つて下さるか」

「八の顔だつて汚しつ放しにはなるめえ、それに、話の様子じや、俺が考えても自害じやねえ」

「有難てえ、それでこそ錢形の親分だ」

「馬鹿野郎、おだてに乗つて出かけるわけじやねえぞ」

「ヘツ、ヘツ」

ガラツ八は自分の額をピシヤピシヤ叩いておりました。この心服し切っている親分から「馬鹿野郎」と叱られる度に、嬉しくて嬉しくてたまらない様子です。

四丁目の畳屋へ行つたのは、巳刻（十時）少し過ぎ、朱房の源吉は引揚げましたが、幸い丈吉の死体は、筵を掛けたまま、まだそのままにしてありました。

「フーム」

筵を除つて一目、平次は呻りました。忙しく四方の様子を見廻して、もう一度ガラツ八の顔に還つた瞳には、「——よく疑つた」というような色がチラリと見えるのでした。

「ね、親分、誰かに殺ばらされたに違いないでしょう」

少しばかりガラツ八の鼻は蠢うごめきます。

「そんな事が解るものか——これだけ力任せに畳針を刺すうち、凝じっとしているのは可怪おかしいな」

「眠っているところをやられたら？」

ガラツ八、今度は少し不安になりました。

「井戸端で眼を開いて寝ている奴はない」

「酔っ払っていたらどうです」

とガラツ八。

「丈吉は生れつきの下戸で、樽たるがき柿を食っても赤くなる野郎でしたよ」

主人の弥助は後ろから口を出しました。せっかく朱房の源吉が自害にして運んでいるのを、変な場違い野郎が飛出して、「殺し」にしようという態度が癩しゃくにさわってたまらなかつたのです。

「親分、向うの二階から手裏剣しゅりけんを飛ばしたらどんなものでしょう」

ガラツ八はそつと囁ささやきます。畳屋の裏は黒板塀を隔てて、しもたやが二軒、一軒は平屋ひらや

の女世帯、一軒は裕福な浪人者の住居、こちらの方には、小さい二階があつたのです。

「少し遠いな、——それに、畳針は手裏剣には少し軽いからあの二階から打つたのでは、頬に傷をつけるぐらいが精々だ。眼玉を狙つて三寸も打ち込むわけには行くまい」

「……………」

ガラツ八は黙つてしまいました。せつかく神田から引張り出してきた親分の平次も、これでは源吉と大した変りはありません。弥助も、その倅の駒次郎も、職人の勝蔵も口には出しませんが——好い気味だ——といった顔で、ガラツ八の照れ臭い様子を眺めておりません。

「お隣はどんな人が住んでいなさるんで？」

平次は改めて弥助に訊きました。

「右の方は下町の物持のお嬢さんが一人、何でも妾しやうふく腹で御本宅がやかましいとかで、下女が二人ついて暢気のんきに暮していますよ、お名前はお町さん——」

「左の方は」

「御浪人ですが、これは大藩の御留守居をなすつた方で、お金がうんとあります。町内の質屋もとしてに資本を廻して、お子様と二人暮し、——お子様といったところで、もう二十歳はたち近い

お嬢さんで、これはお綺麗な方です」

弥助は揉手もみてをしながら、自分のことのようにニコニコしております。よほど浪人こんいと懇意こんいにしてはいる様子です。

「お年は？」

「厄少やくし過ぎでしょうか、お名前は大里玄十郎様、立派な方でございます」

三

平次は一応現場を調べた上、町内の質屋へ行つてみました。

大里玄十郎の暮し向きの事を訊くと質屋あるじの主人あるじが言ったのは、まるつきり大嘘、質屋へ資本もとを廻もしているどころか、その日の物には困らないまでも、暮しが贅ぜい沢たくなのと、娘のお才が派手好みなので、内々、腰の物までも曲げることがあるという話——

「近頃畳屋とすつかり昵懇じつこんになつたようですから、いずれあの娘を、駒次郎へ押しつけるつもりでしょう。この節の武家は、そんな事をなんとも思つちやおりませんよ。——それにあの畳屋は一丁目から御見附おみつけまで、表通りには、及ぶ者もない物持ですからね」

そつと、こんな立入ったことまで教えてくれました。

平次はその足ですぐ大里玄十郎の格子の外に立ちました。

「何？ 錢形の平次が参った、ちようどいい塩梅だ、こつちにも言いたいことがある」

一刀を掲げて、上がり框にヌツと突つ立ったのは、青髯の跡凄まじい中年の浪人です。

「恐れ入りますが、ちよつとお嬢様に御目に掛りとうございますが」

慇懃な平次を尻目に見て、

「馬鹿奴ツ、手先御用聞に口をきくような娘は持たぬぞ——この家の二階から手裏剣を打つて丈吉を殺した——などと言った奴があるそうだが、とんでもない野郎だ。十間以上離れたところから畳針を飛ばして、人の命をとるほどの腕があれば、浪人などはしていないぞ」

「恐れ入ります」

「恐れ入ったら帰れ帰れ、畳屋の職人を殺すほど怨みも理由もある拙者ではない。この上り用事があるなら、せめて町方の役人を伴れて来い、馬鹿馬鹿しい」

いやもう滅茶滅茶です。

「とんだお邪魔をいたしました、御免」

平次とガラツ八は、キリキリ舞いをして引下がりました。何心なく振り返ると、袖垣そでがきの上から一と目に見える縁側に、二十歳はたちばかりの武家風とも町家風ともつかぬ娘が立って、二人の後ろ姿を見送っているのと、顔を見合せてしまいました。

背の高い、少し骨張った娘ですが、何となく艶なまめかしい十人並に優れた美しさです。

「親分、済まねえ、手裏剣は間違いだつたネ」

「追いつがるようにガラツ八。」

「最初はなつから俺はそんな事を考えちやいねえよ」

「じゃ、やはり自分の眼へ針を刺して井戸端へ頭をぶつつけたんで」

とガラツ八。

「そんな事が出来る芸当かどうか、やってみな」

「へッ」

そんな事を言いながら、二人はもう一軒の隣、お町という娘の住んでいる家の格子の外に立っております。

「お町さんは居なさるか。神田の平次だが、ちよいと逢って下さい」

「へエ——」

年頃の下女は奥へ飛んで行きました。隣に騒ぎのあったことは知っているはずですから、神田の平次という言葉がピンと来たのでしよう。

しばらくすると、

「あの、済みませんが、お嬢さんは寝やすんでおります、え、お風邪かぜでございます。どんな御用でしよう？」

先刻の下女が物に怯おびえたように、畳の上へ手を突いているのでした。

「風邪？ それはいけないな、夏の風邪は抜け難いから、用心なさるがいい、いつから寝なすつたんだ」

平次の調子は至って平坦でした。

「昨夜ゆうべ宵のうちからお加減が悪そうでしたが、今朝はもう起きていらつしやいません」

「そうかい」

「あの、御用は？」

「なアに、大した事ではないが、——隣の畳屋の職人が死んだのをお聞きなすつたらう」

「へエ」

「あれは、人に殺されたんだと思うんだ。心当りはあるまいね」

「いえ、何にも」

「あの丈吉とかいう男は、時々ここへ来ることがあったかい」

「一度もいらつしやいません。私などはお顔もろくに知らないくらいで——」

「駒次郎兄哥は時々来るだろうね」

「へエ——」

そう言つて下女はハツと袖口で口を覆おおいましたが続けて、

「でも、でもあの、近頃はさっぱりいらつしやいません」

「そうだろう、大里様のお才さんと近いうちに祝言するそうだから」

「……………」

妙に探り合いのようなくすくす撥つたい空気です。

「お嬢さんにはお目に掛るまでもないんだが、その代りあの塀のあたりを見せて貰いたいよ、丈吉殺しの曲者が、あの辺から塀を越して行つたかも知れないんでネ」

「……………」

下女が返事をする前に、ガラツ八を目でさしまね磨いた平次は、畳屋との境になつてゐる黒板塀の方へ近づきました。

南を塞ふさがれているので、草花の育ちそうもない塀の下は、ジメジメした苔こけの上に、女下駄の跡だけが幾つかほのかに読めます。

「親分、男なんざ入った様子はありませんね。それにこの塀ときた日にや、まさか人間は潜ひそられないが、バツタ、カマキリ、蝶ちょうちよう々々、蜻蛉とんぼは潜り放題だ」

全くその通りでした。晝屋の方こそ、黒々と塗つて、大した不体裁もありませんが、こちらの方は見る影もなく荒れて、支えの柱は所々歪ゆがんだまま、曝さらされきった板は、灰色に腐蝕ふしよくして、所々に節穴さえ開いております。

平次とガラツ八が塀際を離れて元の格子戸の前へ来ると、青い顔をした娘が少し取り乱した姿で目礼をしておりました。

「お町さんでしようね、とんだお邪魔をしました」

「どういたしまして」

「気分はどうです」

平次は格子の中へ入つて、言葉はひどく丁寧ですが、いつもに似ぬ凶々しい態度で上がりかまち框に腰を下ろしました。

「有難うございます、大したことはございません」

何という痛々しい感じのする娘でしょう。白粉おしろいつ気のない初々しきも充分に美しいのですが、可哀想に眉から左の耳へかけて火の燃えるような、赤痣あかあざです。

「そんな事で変な気を起しちやならねえ」

平次はつかぬ事を言つて、この娘の宿命的な醜い半面を見詰めました。右半面がお才などは足許にも寄りつけぬほど美しいのに、これはまた、何という造化の悪戯いたずらでしょう。血と肉で出来た大傑作だいけつさくへ何か気に染まぬ事があつて、赤い絵の具皿を叩きつけたといった顔です。

「ところで、女世帯では何かと物騒だろう。隣の畳屋を見張らせながら、ごく用心の良い男を一人置いて行くが、泊めて下さるでしょうね」

「えッ」

「八、手前てまえ今晚から、当分ここに泊つているんだよ、用心棒に」

「親分、あつしが？」

「そうよ、若い女の中へ転がしておくには、手前のような用心の好い男は滅多にねえ」

「チエツ、情けねえことになりやがったな」

「頼んだよ、八」

平次はろくに返事も聴かず、そのまま神田へ引揚げました。

「弱ったなア、どうも、驚いたなア」

後に残された八五郎の弱りようというものはありません。

若い女二人の白い眼に射竦いすくめられて、いつまでももじもじしていることでしょう。

四

「親分、大変な事になったぜ」

「また大変かい、八の大変に驚いていた日にや、御用聞が勤まらねえ」

平次は縁側で相変らず朝顔の世話に余念もありません。

「立派な御用聞が朝顔道楽を始めるようじゃ——」

「なんだと、八」

「へッ、へッ、天下は泰平だつて話で」

「馬鹿にしちやいけねえ、——とところでその大変というのは何だ」

「また一人死にましたぜ」

「何？　とうとうお町が死んだのか」

平次は朝顔を投^{ほう}り出すように立上がりました。

「お町——とどうして解るんで」

ガラツ八の鼻はキナ臭^{うごめ}く蠢^{うごめ}きます。

「俺はそれが危ないと思ったからお前を泊めたんだ、なんだって夜っぴて見張っていねえ」
 「それは無理だよ親分、そう言ってくれさえすりやア、あの娘の首っ玉へでも齧^{かじ}りついていたのに、あつしは外から来る野郎ばかり見張っていたんだ」

ガラツ八は叱られながらはなはだ不服そうです。

「とにかく行ってみよう、もうこれつきりだろうと思うが、一応見ておかないと、後々のことが安心ならねえ」

二人はすぐさま飛出しました。

麴町四丁目の、お町の家へ行ってみると、隣の畳屋の井戸から引揚げて来たばかりのお町の死体は乾いた物に着換えさせて、二人の下女と、それから、日本橋から駆けつけたという、お町の姉というのが、線香を焚^たいたり、鉦^{かね}を叩いたり、泣き濡れて拜んでばかりおりました。

「畳屋の井戸へ飛込んだのかい、なるほどこつちの方が少し深い」

平次は今さらそんな事まで感心しております。

「銭形の、御苦勞だね」

畳屋からノソリと出て来たのは朱房の源吉、朝つからアルコールが胃囊へ入つたらしく、赤い顔と据つた眼が、なんとなく挑戦的です。

「朱房の兄哥、八五郎の奴がとんだお節介をして済まなかつたねえ、勘弁してくんな」
平次は微笑をさえ浮かべて、蟠りのない調子でこう言いました。

「なアに、自害が自害と解りさえすりやアそれでいいのさ。人殺しの下手人が解らなかつたとなると、この辺を縄張りにしている、この源吉の顔に拘わるといふものだ、——なア八兄哥、今度はお町は井戸へ投げ込まれたに違えねえなんて言わないことだぜ」

「そんな事を言やしません」

八五郎は盆の窪のあたりを搔いております。

「丈吉とお町は言い交した仲さ、——丈吉が借金だらけで自害したんで、お町がその後を追うつもりで、わざわざこの井戸までやって来て身を投げた——とね、本阿弥が夫婦づれで来ても、この鑑定に間違いはあるめえ」

朱房の源吉は本当にしたり顔でした。

お町の家へ引返して来ると、姉のお勢はすっかり心を取り直したもののか、薄化粧までして平次とガラツ八を迎えました。

二十七八——どうかしたらもう少し若いでしょうが、とにかく、素晴らしい肉体を持つた女で、その妖艶な美しさは興奮した後だけに、かえって眼の覚めるようです。若い雌鹿のように均勢のとれた四肢、骨細のくせに、よく脂の乗った皮膚の光沢などは、桃色真珠を見るようで、側へ寄っただけで、一種異様な香気を発散して、誰でも酔わせずには措かないといった、不思議な種類の女だったのです。

「お、人形町の師匠じゃないか」

「あら、銭形の親分」

取り繕ったところをみると、紛れもありません。それは人形町で踊りの師匠をしている、有名すぎるほど有名な女だったのです。

「お町さんの姉というのは、師匠だったのかい」

「え、あの娘も本当に可哀想な事をしました。思い詰めた事があつたら、それと私に相談してくれればいいものを」

お勢は新しく湧いて来る涙をどうすることも出来ずに、身を捻^{ねじ}つて、袖口を顔に押当てました。痛ましくも顫^{ふる}える肩のあたり、何という艶^{なまめ}かしくも美しい悲しみの姿態^{ポーズ}でしょう。「気の毒だったネ、そんな事もありはしないかと思つて、八五郎を側へ付けておいたんだが——」

「そうですね、本当に親分さんの思いやりは、どんなに有難いと思つたか——でも、死ぬ気になつた者は、どんな隙^{すき}でも見つけます。八さんのせいにしちやお気の毒じゃございませんか」

「まあまあ、あんまり泣くのも妹さんのために良いことじゃあるまい、諦^{あきら}めろと言つては薄情だが」

「有難うございます、親分さん」

平次はいい加減にして神田へ引揚げました。事件はこれで何もかも大団円になつたようですが、平次の心の中にはまだまだ済まない事ばかりです。

「八、気の毒だが、これから三日に一度ぐらいつつ四丁目へ行つてみてくれ」

「四丁目？」

「麴町四丁目だよ。畳屋と大里とかいう浪人の家と、それからお町の家へ当分姉のお勢が

住む事になったそうだから、ついでにそれも見廻るんだ」

「まだあの辺に何かあるんですかい、親分」

「これから本当の芝居が始まるだろうよ、見ているがいい」

平次は、何やら呑込み顔にうなずきます。

五

それから十五六日、平次は外の大きな事件に首を突っ込んで、早出の遅帰りを続けたために、ガラツ八に逢う機会もありませんでした。

「親分、驚いたぜ、全く」

ガラツ八はどうとう平次を捕まえました。

平手で長い顎あごから頬を撫でて、恐ろしく擦くすぶつたい顔をして見せるのです。

「何に驚いたんだ、——また四丁目で誰か死んだのかい」

「そこまでは行かねえ、が、あのお勢がどうかしたんだ」

「……………」

「妹の家へ入り込んだはいが、近頃は恐ろしく若作りで妹の三十五日も済まないうちから、町内の若い者を集めて、浮れ切っているんだ」

「フーム」

「ひがみひげしやう日髪日化粧で、どう見たって二十二三だ。大変な化物だぜ、あの女は」

「それがどうしたんだ、お前が口説くどかれてもしたと言うのか」

「ヘツ、口説きもどうもしねえが、あんまり色っぽいんで、気味が悪くて、長居は出来ねえ」

「たいそう気が弱いじゃないか」

「だま騙されると思つて、親分も一度行つてみなさるがいい、うけあい請合二三日はブーツとするから」

「それは面白かろう、見ぬは末代まつだいの恥だ、すぐ行くとしようか」

「お静さんが気を悪くしなきやアいいが」

「何をつまらねえ」

二人はもう日が暮れたというのに、麴町四丁目までやって来ました。

「お勢さん、親分を伴つれて来たぜ」

案内役のガラツ八は、顎から手を外して、格子を開けます。

「あら親分、その後はすっかり御見限りねえ、でもまあよく」

といった調子、荒い浴衣の袖を翻かえして、ニッコリすると、その辺じゆう桃色の媚こびが撒まき散らされて、何もかも匂いそうです。

「これは驚いた」

「あら、何を驚いてらつしやるの親分、ちょうど淋しがついているところよ、ゆつくりなすつてもいいでしょう」

手を取つていきなり奥へ。

人形町に居る時は、色白の素顔を自慢したお勢、どう踏んでも三十がらみに見えた大年増でしたが、厚化粧ささへににこくさいしきの極彩色をして、精いっぱいこびの媚と、踊りで鍛えた若々しい身のこなしを見ると、二十二三より上ではありません。

どっちが本当のお勢なのか、こうなると平次も見当がつかなくなるくらい。

「驚いたね、どうも、お勢さんがそんなに若いとは思わなかったよ」

照れ隠しに煙草ばかりくゆ燻らしております。

それから酒。

十重とえはたえ二十重に投げかける妖あやしの網を切り破るように、平次が神田へ帰って来たのは、もう夜中過ぎでした。

それからは平次の意気込みも違い、ガラツ八の報告も急に活気づきました。

晝屋の勝蔵がせつせとお隣へ通い始めた、という報告があつてから十日ばかり経つと、今度は晝屋の息子の駒次郎が急にお勢に熱くなり出して、町内の狼おおかみれん連も、好い男の勝蔵も、少し顔負けがしていると云つて来ました。

お勢の妖しい魅力は、間もなく麴町中の若い者を気違いにするのではあるまいかと思うようでした。

猛烈な達たてひき引と鞆さやあて当の中に、駒次郎が次第に頭を擡もたげ、町内の若い衆も、勝蔵も排斥して、お勢の愛を一人占めにして行く様子でした。

油のように行渡る年増の愛情は、駒次郎をすっかり夢中にさして、もう大里玄十郎の娘お才などの事を考えている余裕もなくなつてしまった様子です。

「何かきつと起りますぜ」

ガラツ八がそう云つて、額を叩いたり、手を揉んだりしたのは、お町が死んで四十日目あたりのことです。

六

「いよいよ大変だ、親分」

ガラツ八が飛込んで来たのは、もう日射しの秋らしくなって、縁側の朝顔も朝々の美しい装よそおいが衰えかけた時分の事でした。

「また大変か、今度は誰の番だ」

「豊屋の駒次郎が殺やられましたぜ」

「今度は自害じゃあるまい」

「豊庖丁で、首を右から後ろへ半分も切るなんてことは、朱房の親分が見たって自害にはならねえ」

「よしッ、行ってみよう」

平次はすぐ飛んで行きました。

豊屋の裏木戸に入って、群がる野次馬を掻き分けるように井戸端へ近づくと、井戸と物置の間の朝顔の垣根の中に、豊屋の息子の駒次郎が、紅あけに染んで倒れているのでした。

「銭形の兄哥、御苦労だね」

「おや朱房の兄哥」

「下手人は拳がったよ」

「へエ——」

「職人の勝蔵さ、隣へ引越して来た踊りの師匠を張り合つて、主人の息子を殺したんだ」
源吉はだいぶ好い心持そうです。

「本人は口を割つたらうか」

「知らぬ存ぜぬだ、いずれは少し痛めなきやアなるまい」

「証拠は？」

「何にもねえ——と言いたいところだが、ありすぎて困っているんだ。刃物は勝蔵の使っている畳庖丁だ、——もつとも本人は井戸端へ忘れて置いたつていうが、良い職人が道具を井戸端へ忘れるはずはねえ、それに、昨夜駒次郎が外へ出たがるのを、ひどく気にしていたそうだ」

源吉のいう証拠はあまりに通り一遍のものです。

「駒次郎を怨む者は、まだ外にもあるはずだ。怨みだけで言えば、町内の若い者が半分ほ

どは下手人の疑いがある。それから、大きい声じやいえないが、娘を捨てられて怒っている浪人者もいるぜ」

「大里玄十郎か」

「まあね」

「そんな事を言つたつて、勝蔵が下手人でないとは決らないぜ、俺はともかく八丁堀へ行つて来る。町内の若い者なり、浪人なりを縛しばるがよからうよ」

朱房の源吉は、いや味を言いながら行つてしまいました。

町内の若い者、半分は下手人の疑い——と聞いて怯おびえたのか、路地を埋めた野次馬は、一人去り二人帰り、間もなくだいたい消えてしまいます。

「親分、本当に勝蔵じやありませんか」

ガラツ八は少し心配そうです。

「解らないよ、だがね、八、駒次郎の傷は、喉のどぐえ笛の右側から始まって、大して深くはないが、首を半分切り落すほど後ろへ長々と引いているぜ、正面から向つた相手がこんな芸当が出来るかしら」

「斬つて下さいと首を突き出したようだ——つて親分は言うんでしょう」

「その通りだよ」

「背後うしろから切つたとしたら」

「抱きついて念入りに刃物を引かなきゃア、こうは斬れない」

平次の言うことはだいぶ變つておりました。

「じゃ親分、どういうことになるんで」

「まだ何にも解つちやいないが、畳庖丁のような短い得物で、これだけ念入りに斬ると、下手人はうんと血を浴びたことだろうな」

「……………」

「勝蔵の持物をみんな見せて貰つてくれ、血の付いたものが一つでもあれば下手人だ」

「へエ——」

ガラツ八は飛んで行きましたが、間もなくつままれたような顔をして歸つて来ました。

「血なんか付いた物は一つもありません」

「床下や天井裏や押入には」

「待つて下さい」

ガラツ八はもう一度飛んで行きましたが、どこにも怪しい物は見付かりません。

「なきやアいい。住込みの職人が、着物を一と揃そろいなくして、人に気づかれぬはずはない。やはり勝蔵じゃなかつたんだらう、——念のために水を一と釣つる瓶びん汲くんでみる——井戸へ沈めた様子もないだらう」

「……………」

「ところで八、俺は近頃朝顔を咲かせて楽しんでるが、自分で育てると、草花も、我が子のように可愛いものだ」

「……………」

平次が人殺しの現場で、いきなり朝顔の話を始めたので、ガラツ八も呆あっけ気に取られております。

「草花を可愛がる心持は、また格別だよ。自分で育てないのでも、折れたり、散らされたりすると、我慢が出来ない」

「……………」

「駒次郎を殺した下手人は、朝顔の垣かきを除けて大廻りして逃げている。こんな優しい人殺しは珍しかろう」

「……………」

「荒っぽい男や、浪人者の仕業じゃねえ」

「……………」

「八、俺はもう下手人探しが厭いやになったよ。こんな時は熱いお茶でも飲んで、休むんだね」
平次はそんな事を言いながら、塀隣のお勢の家へ引揚げました。

七

「まあ、親分」

「お勢、これはどうした」

家の中はガランとして、下女の姿も見えない上、昨日までは、あんなに厚化粧くしまきの若作りだったお勢が、白粉おしろいも紅も洗い落して、元の素顔に、無造作な櫛くし巻まき、男物のような地味な単衣ひとえを着ているのでした。

「引越しですよ、私はやはり人形町の方が水に合いそうで——」

「それもよからう、——とところで、俺もつくづく岡っ引が厭いやになったよ」

「まあ」

「気の毒だがお茶でも貰おうか」

平次は庭から縁側へ廻つて、青桐あおぎりの葉影の落ちるあたりへ腰を下ろすと、お勢はいそいそと立つて渋茶を一杯、それに豆落雁まめらくがんを少しばかり添えて出しました。

「お勢、今日一日俺は岡つ引じやねえ、お前の昔馴染——まあ、兄貴か友達と思つて話してくれ」

「……………」

平次の言葉は急にしんみりしました。

「俺は、口幅つたいようだが、この間からの不思議な事の経緯いきざつを、何もかも知っているつもりだ。最初から話してみよう、——もし違つたところがあるならそう言つてくれ」

「……………」

お勢は首をうなだれました。白粉つ気がないとやはり元の三十前後の大年増ですが、その物淋しい美しさは、極彩色のお勢よりはかえつて清らかで魅力的であります。

「駒次郎は、お前の妹のお町と言ひ交していた。かなり深い仲だったに相違ない、毎晩合図をしては、あの塀を挟んで両方から話したり、笑つたり、泣いたりしていたんだ——それが、大里玄十郎父娘が引越して来ると、駒次郎の心は急にお才の方へ傾いてしまった。

父親の弥助も、武家の娘を畳屋の嫁にするつもりですっかり夢中になって、あの大里玄十郎がおほほらっふき大法螺吹の山師だとは気がつかなかつたんだ」

「……………」

「お町は毎晩合図をしたが、駒次郎はもう塀の側へ来てはくれなかった。で、とうとう我慢がし切れなくなつて、切れてやるから、たった一度だけ逢つてくれ——と言つてやった」

「……………」

「その手紙を見付けたのは丈吉だ。お町に気があつたから、駒次郎のふりをして塀の向う側へやつて来て、駒次郎がするように、塀の穴へ眼を当てて見た。お町はそのとき駒次郎を殺して、自分も死ぬ気だつたんだ、いっぞや駒次郎が自分の家へ忘れて行った畳針を持ち出して塀のこつちから、一思いに眼を突いた」

「……………」

「丈吉は声を立てたかも知れないが、なにぶんの深傷ふかで、井戸端へ行くのが精々だった。釣瓶の水で眼を冷そうとしたが、急に力が抜けて井戸端に突つ伏して死んでしまった。眼を洗わなかつた証拠には丈吉の右の眼には少しばかり墨が付いていた、たったそれだけの事で俺は何もかも見破つたような気がした」

「……………」

何という明智でしょう。平次の言葉は、見て来たようにはつきりしております。

「俺は大方察したが、お町が殺したという証拠は一つもない、それに、男に捨てられたお町の心持がいじらしかった——万一自害するような事があつてはならぬと思い、それとなく戒めた上、八五郎を付けておいたが、やはりその晩身投げをしてしまった。可哀想だが、俺には救いようがなかったのだよ」

「……………」

「それから、お前が出て来た。妹の敵を討つつもりで、本心にもない厚化粧に浮身をやり、町内の若い者を集めて、駒次郎の気を引いた、——浮気な駒次郎はお才を振り捨ててお前のところへ来たが、女郎蜘蛛の網に掛った虫のように、どうすることも出来なくなつたのだ」

「……………」

「物置の前で逢引をした晩、井戸端に勝蔵が忘れて行った庖丁を見ると、お前は急に駒次郎を殺す気になった。抱き付いてくるのを、自由にされるような振りをして、背後から庖丁の手を廻して、喉から後ろへ存分に斬った」

「……………」

「朝顔の垣を踏み倒すのが可哀想になって、お前は廻り道してここへ逃げ帰り、血だらけになった着物を始末し、白粉も紅も洗い落して、元のお勢になった」

「……………」

「どうだ、違ったところがあるか」

平次の話は微びに入り細うがを穿うちました。語りおわって顔を挙げると、お勢は三鉢四鉢大輪の朝顔を並べた縁に突っ伏して、正体もなく泣いているのでした。

「親分、一々その通り、寸分の違いありません。さア、私を縛って下さい」

「いや、縛るとはまだ言わないはずだ」

「けれど、これだけは御存じなかったでしょう。お町は私の娘——天にも地にも、たった一人の生みの娘だったんです」

「え、お前の娘、——年が近過ぎるようだが」

「近いもんですか、お町は十八、私は三十四」

「三十四？」

「日本橋のお大店の若旦那との間に、——私が十六の時生んだ娘こでした。お店に置くのが

面倒で、月々仕送つて頂いてここに置きました。私の側へ置くと、筋の悪い狼達おおかみが集まつて来て、ろくな事を教えないだろうと思つたのがかえつて間違ひの基もとだったのです」

「それは——」

「娘のお町が死んだ時、私も死んでしまいたいと思いましたが、身仕舞して鏡を見ると、まだまだ私には若さも綺麗さも残つていそうに思つたので、一と芝居打つてみる気になりました。武家育ちの張子細工はりこざいくのような娘に負けようとは思いません」

「……………」

「私は勝ちました。土壇場どたんばですつぽかして、駒次郎に首でも縊くらせようと思つたのが、あんまり執拗しつじつこく絡みつかれて、ツイ庖丁を振り上げてしまいました。私は娘を騙だました男に、どんな事があつても身は任されません」

お勢はもう泣いてはいませんでした。真つ直ぐに目を起すと、観念し切つた殉教者のような清らかさが、その蒼白い顔を神々こうごうしくさえ見せるのでした。

「お勢、俺は今日一日岡つ引じやないと言つたはずだ。——駒次郎は鎌かま 鼬いたちにやられて死んだんだよ。放つておけば証拠がないから、誰も気がつくはずはない、勝蔵は笹野の旦那にお願いして、縄を解いて貰う手もある」

「親分」

「解ったかお勢。——人を殺したのは悪いが、俺には縛る力はない、——せめて死んだ人達の後生をとむら吊ってやれ。解ったか」

「ハイ」

お勢も、側で聞く八五郎も、すっかり泣き濡れて、しばらくは顔も挙げませんでした。

*

お勢はその後踊りの師匠をよ廃して、お町を葬った寺の花屋の株を買い取りました。美しく清らかな花屋のおかみがしばらくの間江戸の評判だった事はいうまでもありません。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（四）城の絵図面」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成16）年8月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1934（昭和9）年7月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2018年5月27日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

くるい咲き

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>